AROUND THE WORLD 23

日本語とエチオピアの言語の共通点（Sidaama 語）[1]

河内一博　Kawachi Kazuhiro（防衛大学校）

不明瞭な表現

言語の専門家，またそうでない人たちによっても，日本語は特殊な言語であると言われることがある。しかし，その少なくともいくつかの場合は，英語をはじめとする欧米の言語やよく研究されている言語の視点から日本語を見ていて，他の言語を考慮に入れていないために，そのように思われるだけである。これからの連載では，エチオピアの中南部で話されている Sidaama 語（アフロ・アジア大語族のうちのクシ語族）のデータを紹介しながら（関連がある場合は英語についても述べながら），日本語といくつかのアジアの言語に特有と言われる現象が，このような地理的にも系統的にも遠い言語に存在することを示す。

今回のトピックは，「不明瞭な表現」である。日本人ははっきりものを言わないとか，日本語には不明瞭な表現が多くあるなどとよく言われる。実際には，はっきりと言うことができる場面であったとしても，特に文末をはっきりと言わないことがある。さらには，名詞句の指示対象や数量までもぼやかすこともある。例えば，「コーヒーなどいかがですか？」とか「オレンジを 10 個くらいもらえますか？」などという言い方をすることがある。これらの表現は，話し手の頭にあるものがそれぞれ，「コーヒー」という特定の飲み物，「10 個」という特定の数であっても使うことができる。このようなとき，Sidaama 語でも (1) と (2) のように言うことができる。

(1) bunú-gede　re　aga　hasi'ritta？
コーヒーの - よう　もの（複）　飲む　欲しくなった / あなた（女性）が

⇒「コーヒーのようなものを飲みたいですか？」

文字通りには，「あなた（女性）はコーヒーのようなものを飲みたくなりましたか？」

(2) tonné　burtukaané　geešša　aďa　dandeemmo？
10 の　オレンジの　程度　取る　できる / 私（男性）が

⇒「オレンジを 10 個くらいもらえますか？」

文字通りには，「私（男性）は 10 個のオレンジの程度のものを取ることができますか？」

このような表現は，頼んだり申し出たりする場合に，はっきりと言わないことによって，控え目で丁寧に聞こえるという原理を使っている。個々のストラテジーには違いがあるかもしれないが，原理は言語間で似ていて，日本語以外の言語で不明瞭な表現の例が見つかったとしても不思議ではない。（実は英語でも，*Would you like something like coffee?* や *Could I have about/around ten oranges?* のような表現を，丁寧に聞こえるようにするためのストラテジーとして使うことがある。）

表紙写真について

多文化・多言語のシンガポール

鳥飼慎一郎　Torikai Shinichiro（立教大学）

洋の東西を問わず，海峡というものは異なる文明が接触し，交わる場所である。アフリカとヨーロッパが間近に接するジブラルタル海峡やアジアとヨーロッパが行き交うボスポラス海峡などが好例である。マラッカ海峡も例外ではない。インド洋と太平洋を結ぶこの海峡は，古くから中国人，インド人，ポルトガル人，オランダ人，イギリス人などが交易上の利益を求めて訪れ，仏教，ヒンドゥー教，イスラム教，キリスト教が伝えられ，様々な国や民族の船が行き来したのである。そのマラッカ海峡の東端に位置するシンガポールはまさにこの海峡の歴史を絵に描いたような国である。

2 つの寺院が並んだ写真はシンガポールのリトル・インディアで撮ったもので，左側の黄色い建物は恆佛寺という中国仏教寺院で，右側の白っぽい建物はシンガポールの中国仏教とタイ仏教が融合した千燈寺院である。千燈寺院の正式名称は「シャカムニ・ブッダガヤ寺院」と言い，1927 年にタイから来たプティーサーサラ師によって建てられた。中に入ると，黄色い法衣をまとった高さ 15 メートルの大きな仏像が安置されている。日本の仏像とはかなり違った印象の親しみを覚える表情がいい。この寺院の道を挟んだ反対側には龍山寺という中国の道教の寺院があり，近くにはヒンドゥー教の寺院も数多くある。多民族，多宗教のシンガポールならではの光景である。

地下鉄に乗ろうと駅に行くと，英語，中国語，マレー語，タミル語の 4 ヶ国語で書かれた表示が目に入ってきた。シンガポールは多言語国家でもあることを気付かされた瞬間であった。